

# 地域連携活動など(インターンシップからの卒業記念品誕生)

経済学部 企業経営学科 4回生 小関 加奈

## 何事も始めてみないと分からない

昨年の夏休みの2ヶ月間、就業力育成支援室主催の中期インターンシップに参加しました。私は、「株式会社 清原」という企業にお世話になりました。清原は袱紗や念珠といった、包むアイテムを主に製造している企業です。新たな販路の拡大、若者への袱紗の認知の向上といった仕事内容に惹かれ、参加しました。そもそもインターンシップに挑戦しようと思ったのは、その年に就



本社にて清原社長と

職活動が始まる大きな理由でした。それまでは少数精鋭の環境で働けることから、中小企業で働きたいと漠然と考えていましたが、企業の実状というものを把握していないため、不安が募るばかりでした。そこで、実際に働くことで中小企業を少しでも理解しようと考え、始めることにしたのです。

## 成果をあげるということ

私がインターンシップに参加したのは、就業力育成支援室主催のインターンシップが他と少し違うという理由の一つでした。今回のインターンシップは一週間という短期ではなく、6週間という中期で行うものです。そのため、じっくり事業に取り組むことができ、また、社内の方々とのコミュニケーションも十分に図ることができます。その上で、「成果」を上げることをノルマとして課されました。学生は企業で働くことで、イメージとのギャップを解消したり、社会人の働き方を学んだりすることができます。しかし、企業にとっては、学生という未熟な人材の育成を担うた



社内での仕事風景。パソコンを多く利用していました。

め、大きな損失になり得ます。そこで、お互いが納得できるインターンシップにするには、「成果」が必要不可欠となるのです。お互いが「本気」になってこそ成り立つインターンシップです。私自身も、自分を試すつもりで参加しました。

## 一人で打ち込むさみしさ

清原には、私一人が配属することになりました。他の学生達のインターンシップ先では、数人ずつで配属されていたため、少し不安を抱えたまま始まることになりました。本社の活動では、一日の始まりに本日の仕事内容を丁寧に説明していただき、個人で作業をしたのち、最後に業務日報を提出するというルーティンでした。また、本社以外のアンテナショップに向かい、商品一つ一つを把握したり、大阪に出向いて百貨店に向かい、どのような場所で袱紗が扱われているのかを自分の目で確かめに行ったりもしました。しかし、どの作業にも「正解の終わり」がなく、誰にも相談することができず、このままでよいのかという不安が日増しに増え、満足のいく活動が出来なくなっていました。

## 「お願いする」という一歩

清原から与えられた仕事内容には、「卒業記念品調査」というものがありました。袱紗は卒業記念品として注文されることが多

いのですが、果たしてどのくらいの大学が袱紗を注文しているのかということまでは把握が困難でした。そこで、滋賀県を始めとした近畿周辺の大学に、電話でうかがうという仕事を行いました。この仕事から、私の仕事への姿勢が変化しました。どのようなアンケート内容にするのか。一人で考え込むのではなく、大学の先生や、清原の社長さんに相談しながら作り上げました。その結果、大学の卒業記念品の決定方法や、選択基準に特徴を見つけることができました。また、私の大学の友人に片っ端から連絡を取り、若者の袱紗の認知についても知ることができました。一人で仕事をするのではなく、多くの人々の力を借りながら物事を成し遂げる。私はこのやり方のほうが自分に向いているのだと知ることができたのです。



卒業記念品製作のデザイン案

## 小さな気付きから物事は動き出す

今回のインターンシップでは各大学の調査までが仕事内容でした。しかし、私はこの調査をきっかけに、滋賀大学の卒業記念品を袱紗にすることを新たな目標に立てました。インターンシップの期間が終了したのちも、先生方に何度も相談し、卒業記念品を担当する学生や清原の社長と何度も打ち合わせを行いました。



インターンシップ報告会

そして、ついに、今年の卒業記念品を完成させることができました。琵琶湖を彷彿とさせるような青、見開きの手元部分に見える滋賀大学の校章。袱紗としての機能を損ねることなく、使用するたびに母校を思い出せるような、滋賀大学オリジナルの袱紗が出来上がりました。卒業

式の日、この袱紗を受け取った沢山の卒業生から、「とても嬉しい。本当にありがとう」との声をいただきました。これまでの積み重ねが一気に報われた瞬間でした。

初めはここまで行くことを予想すらしていなかったインターンシップ。しかし、多くの人々の声を聴き、また様々な人を少しでも多く巻き込んだことで、些細な希望を実現することができるまでに至りました。この経験は現在の就職活動や、生き方にも大きく役立っています。小さな気付きを拾い上げ、ひたむきに実現させていく過程の大切さを胸に刻み、これからも様々な物事に取り組みたいと考えています。



出来上がった卒業記念品を清原社長とともに



完成した卒業記念品